

ある披露宴にて

荒井 良

子どもの医学協会代表

10年近く前のことだが、私たちの「子どもの医学協会」のメンバーの1人の助産婦さんが結婚され、その披露宴に出席することになった。熱烈な恋愛結婚で、新郎は、ある国立研究所の極めて秀でた物理学の研究者であった。

アルコールが適当に回ってきた頃、新郎、新婦それぞれの側から挨拶が始まった。当然新郎側から、というのがしきたりである。新郎側を代表した方はいわれた、「新郎は、極めつきの優秀な研究者で、その仕事は、まさに世界にとって不可欠の価値あるものです。新婦は助産婦さんとうかがっているが、こうした大事な研究をする新郎と結婚されたら、できるだけ早く仕事をやめられて、内助の功を尽すようになっていただきたい」。この挨拶には、新婦側の立場で出席していた私には、「何をいうか」という腹立

たしさを感じさせられた。口調も居丈高な感じであったからであるが。

しかし、次に新婦側の代表としてその勤務先の病院長が話すことになっていたから、私は黙っていた。ところがその日、体調を崩しておられた当の病院長の挨拶は弱々しく、「何とぞよろしく」程度で終わろうとしていた。

その時、新婦が私のところに小走りに近づいてきてささやいた。「先生、何とかして」。それならば、と承知した私は、病院長の挨拶が終わると同時に立ち上がって次のように述べた。

「物理学の研究が必要であることは私も認める。しかし、夫婦が結婚後

の生活をどう送るかは、夫婦2人で決めることであり、新郎側の代表のようないわれ方はいかなるものか。私は、すでにご夫婦が共働きを続ける、という合意のもとで結婚されたときいている。それを尊重していただきたい。と同時に、ここでも一言付け加えさせていただきたい。物理学者であれ、どんな人であれ、母体があって、妊娠、出産というプロセスがあって、初めて人生はスタートする。助産婦という仕事は、この人生のスタートの

ために必要不可欠な職業である。新郎自らもそれを知っておられるからこそ、共働きを続けることを合意されたものと思う」。新婦側から拍手が起きた。披露宴が会費制だったから、これで良かったと今も思っているが、私の心の中では、居丈高な新郎側の代表に少し荒っぽい表現だが、「ザマアミロ」という気分だった。

その直後、新婦がまた近づいてきて「先生、ありがとう。よく言って下さいました」と。「何、当たり前のことを言っただけだよ」と私は酒を飲み続けた。

助産婦さんたち、そしてこれから助産婦を目指す人たちにお願いしたい。自分の仕事、そして自分の目標に真のプライドを持っていただきたい。それは、何よりも重要なことである。

この時のご夫妻はその後3人の子宝に恵まれ、今も共働きをしておられる。すでに婦長となられた当の助産婦さんと今年小さな会で会った時、「主人は、『こどもの医学協会』の活動のことを認めているの」と言ってくれた。

